編集者のことば

本号は，内容には特別大書すべきほどのはなばなしいものがあるいは見えにくいかもしれない。しかし，本号に掲載された諸稿にもられた意味には，本都市研究センターにとっても大事なものがあると，編集者は考えている。

都市研究センターは，昨年度をもって満5年を経た。この間の経過については，関係者自身が不満とも遺憾とも思うことが多かった。だがその間に，熱心な研究者の努力により，無視することのできない実績が蓄積されてきたことは，事実である。それらの跡を反省的に回顧し，そして新たな将来を展望しようという意図が関係者の間にうまれた。この意図を形にしたものが，本書に掲載された諸稿である。

倉沢進・高橋和宏両研究員の指導による4報告は，センター設立後まもなく策定された「多摩地区総合調査」研究報告の一部をなすものである。この調査は，当初の計画をおおよそ終了し，成果をとりまとめる段階に入っているとともに，そこで発見された事実に基づき新たな課題を模索しつつある。その意味で，これらの報告は，やはりセンター5年間の一つの，しかし将来へつなげるしめくくりである。他の2編，本谷勲教授と島田良一研究員のものは，方法論グループから提供されたものであり，むしろ将来における研究の共同をよびかけるものである。

だが，座談会とそれにつづく「現状と課題」が，端的に本号の意味を示している。この意味を表示する企画がこの2編だけであることは量としてはやや物足らないかもしれない。しかし，その内容は，センターにとってたいへんに重い。関係者としては，みずからを反省し将来を期するのに特筆大書してもよいほどの重要性を持ったものと考えている。

本号をもって編集委員長が交代する。私が過去5年間この重任を担当してきたのだが，57年度からは中野尊正研究員が代わることになった。本号は，発行は57年度に入ってからであるが，企画は前年度にたてられていたので「編集者のことば」も私が執筆した。次号からは，中野新委員長が前任者の至らなかったところを補って，さらに本誌を発展させるであろうことを確信し，あわせてセンター次期の飛躍を祈る次第である。

千　葉　正　士